
IS インフィニット・ストラトス 黒き牙 夢見の童女

近場社

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS インフィニット・ストラトス 黒き牙 夢見の童女

【Nコード】

N2942Y

【作者名】

近場壮

【あらすじ】

学年別トーナメントはVTシステム事件の後、二日後に再会された。トーナメントは織村一夏とシャルロット・デュノアの優勝で幕を閉じる事になった。

翌日、IS学園一年一組に騒乱が起きた。

白き騎士と黒き獣

二人の『男』が交錯する。

プロローグ 騒乱は止むことを知らず（前書き）

作者初投稿作品です。

妄想を重ねに重ねた結果、いつの間にか書いてしまった作品です。稚拙な表現があるかもしれませんが、どうかご指導ご鞭撻よろしくお願いします。

ちなみに、オリ主登場は次話です。

キーワード

R15 オリ主 チートではない オリ主アホ オリISが数機出るかも 作者ガンダム知らない ほぼ原作沿い オリ話あり

プロローグ 騒乱は止むことを知らず

「あゝ、体がまだ軋むし頭イテエ。酒抜けてないのか」

七月初旬、火曜日の朝。

早く起きると急かすような朝日に当てられ、俺は目覚めた。

気分は、最悪、だ。

一応曆的には先月開催された学年別個人トーナメントはラウラの事件もあり中止、かに思えたが、なんとまあ何を考えたたのかは知らんが、その二日後に再開された。

日曜日を除き、土曜日まで使ったトーナメントは結果だけ見るなら俺とシャルロットの優勝で終わった。

問題はその後だ。

優勝祝いだ何だと昼の五時から夜の十一時まで食堂パーティーを催し、拳げ句の果てには酒まで出た始末。ホント、誰が密輸したんだか。

そんな事になれば予想できる結末は一つ、俺の実姉であり、我らが恐怖する第六天魔王の織村千冬教官の夜の特別課外授業――決してエロくない――である。

手始めに腕立て腹筋背筋スクワットを百回×二。

そして俺だけがさらに三セットやらされた。

曰く、『貴様は優勝した事で気が緩み過ぎている。自信は適度

でこそ力を発揮し、過ぎれば、それは驕りだ。現にデュノアはパーティーを抜け、既に部屋に戻っただろう』
だそうだ。正論なので反論出来なかった。

ふと天井から隣のベッドに視線を移す。

そこには誰もいない。
モフモフした高級感のあるベッドは使うべき主がない為、少し寂寥感がある。

シャルル……シャルロットは自分が性別を偽っていた事を皆に告白した。

俺の言葉があったから、なんて気取るつもりはない。けれど俺の言葉でここに残ってくれるとシャルロットが言ってくれた時は素直に嬉しかった。

そしてその後、ラウラが――

「……………」

思い返しただけで自分の顔が紅潮するのが分かる。

そう、ラウラが俺に、俺にとって初めてのキス。

端的に言えば、あれが俺にとってのファーストキスだ。
情けねえと言っても構わない。

男の名折れと言っても構わない。

まさか、男の俺が奪われる(……)なんて。

ああ、穴ない？

超入りたいたいですけど。

つか落ちたいんですけど。

しかも治まったとは言え、あれからしばらくラウラは毎朝俺の布団に侵入していたのだ。

まあ、でも、シャルロットがラウラに何かを言ってくれたお陰でラウラはあれから来ない。

ああ、平和だ。

俺はまどろみタイムをそれからしばらく堪能し、制服に袖を通すのだった。

「ねえ、あの噂マジ?」

「マジよ。朝食堂で山ちゃんが顔面蒼白になりながら、またフエルまたフエル、って呪詛をかましてたらしいし」

「……なんか情景浮かぶわ」

朝のHR、毎度毎度このクラスは姦しいと思うが、今日は昨日の騒ぎの疲れが微塵も見えない程だ。

なんだ？

とりあえず手近にいたセシリアに聞くことにした。

「おはよう。なあ、セシリア」

「おはようございます。なんですか？　一夏さん」

「いや、なんかいつもよりクラスが騒がしいなと思って」

「それが、わたくしも先程来たばかりで存じ上げませんの」

「そっか」

すみません、と言ってくるセシリア。

となると、朝早くに来てるシャルロットとラウラ……はまだか。

珍しい。

じゃあ、と。

「おつす、おはよ、 篝」

「ああ、おはよう一夏」

ん？ はて、心なしかいつもより眉が鋭角につり上がってないか？

とゆうより、見るからに不機嫌全開だ。

俺、なんかしました？

まあ、それは後でいいや。

「クラスがいつもより騒がしいんだが、なんかあったか？」

「ああ、それはだな。 転……」

『わあああああツツ！？ 遅刻遅刻遅刻っ、ちいいいこおおおう
ううつツ！？』

『不味いーッ。シャルロット、織村教官が扉に手をかけた。

くツ！？ 間に合えええ！！』

と、廊下からまだ見ぬシャルロットとラウラの声。

ゴッ！ ドガッ！

アンド、恐らく千冬姉の出席簿が頭蓋にめり込んだであろう音。

……安心しな、骨は残さず拾ってやる。

ガラッ

いつもように、凜とした態度で黒いスーツにタイトスカートを着こなす - 何も知らなければ - 美人の姉兼教諭、織村千冬が、

銀髪と金髪の美少女を引きずって教室に足を踏み入れる。

二人とも完全に力が抜けきり、いわゆる『オチてる』状態のようだ。

あ、捨てた。

今生徒をポイツと擬音が聞こえるくらい軽く捨てたぞ。いいのか教

師。

「私の物だ^{せいと}」

ギロリ、と千冬ね……織村先生が俺を睥睨する。
なんでいつもいつも、俺の心を読む。

プライバシーの侵害でWHOに訴えんぞ。

あれ、WHOだっけ。

んん！と咳払いをし、着席を促す千冬姉。

蟻の子を散らすように、クラスの女子が続々と着席する。

かくゆう俺も、筭に両手を合わせ、『ごめん』のジエスチャーを行い、自分の席に戻った。

「諸君、おはよう」

クラスの全員（二名除く）が騒がしくない程度に声を抑え、おは

ようございます、と返す。

千冬姉は一度頷き、全体を見渡す。

「学年別トーナメント、ご苦労だった。満足した者もいよう、奥歯を噛み締めた者もいよう。だが、貴様達はまだまだぼつと出の一年だ。この経験を次に生かせ。無駄なプライドは張るなよ？ 無駄なプライドと懶惰らんたは成長を止める大きな要因だ」

一瞬だけ、俺を千冬姉は一瞥し、再び口を開いた。

「そして喜ばしい事に、我がクラスから優勝者を排出する事が出来た。この功績は一個人では決して出せん。偏にそれは諸君が切磋琢磨した賜物と言える。それを忘れるな。互いに教わり、互いに戦い、互いに誉め合う。それが上達の基本であり、そしてそれが『人』だということを」

人生の先達として、教師としての言葉に、気が付けばクラス全員が拍手をしていた。

ひとしきり拍手を鳴り止んだところで、千冬姉が、さて、と手拍子を打った。

「山田先生だが、今日は来ない。先日の乱入者や、今月に予定されている校外特別実習期間に加え、もう一つ仕事が増えた為、現在急務に追われている。諸君のなかには耳に挟んだ者もいるだろう」

ザワザワと教室がざわめく。

あの噂ってなんだ。

それに千冬姉も珍しくうんざりしたような顔を浮かべている。

「説明するのも億劫だ。入れ」

……入れ、だと？

まさか、でも、いや、まさかな。

「はい」

ざわめきたっていた教室が、水をうつたように静まった。

セシリアとは違う、背筋を沿うように伸びた長めの、白みがかかった色素の薄い金髪。背は日本基準では普通の域の、外国では低めだろっ背丈。

そして、それらをまとめるように整えられたら美しい顔立ちの、女子が入ってきた。

けれど、静まり返った理由は彼女じゃない。

その後に入ってきた、完全無欠、非の打ち所がないほど分かりやすい――

――『男』が入ってきた。

プロローグ 騒乱は止むことを知らず（後書き）

とりあえずここまで書いてみました。

次話はまた近いうち書きます。
それでは、

あでゆー

EP 1 騎士と獣の邂逅(前書き)

今回はオリ主、アホ成分少なめです。

書いても書いてもページって少ないものなんですね。あんだけ書いても……

EP 1 騎士と獣の邂逅

いきなり起きた珍事態に、俺達一年一組全員が言葉を失った。だってそれは当然だった。

入ってきた二人の転入生のうち、一人は女の子、一人はどうみても男だったのだから。

俗に言うイケメンではないものの、明らかに東洋系の顔立ち。黒い髪を僅かに整髪料で立て、白を基調とした制服は僅かに着崩れ、その下には黒いTシャツを着込んでいる。明らかに男装では出し切れない服装と顔だ。

「二人共挨拶をしる」

そんなクラスの様子を意にも返さず、千冬姉は進行を促す。

女の子の転入生もクラスの様子に戸惑ったようだが、隣の男子転入生に目配せを行い、それに男子転入生も頷いた。

どうみても初対面で可能な芸当ではない。知り合いなのか？あの二人。

先に口を開いたのは薄い金髪の転入生だった。

「イタリア代表候補生、ソフィア・フロンティニです。日本に来て日も浅く、まだまだ至らぬ点もありますが一層よろしくお願いします」

シーン。

クラスの沈黙にソフィアさんも目を泳がせたがしょうがない。

俺だって、シャルロットが来た時とは比べ物にならないくらい驚いている。何故か。

「貴様も挨拶しろ」

うーす、と気だるそうに男子転入生が相槌を打つ。

「……七森ななもりなぐさ桜夜さくらよです。二人目の『男』ですが、あんま特別扱いとくじゃなく普通に友達感覚でお願いしやす」

以上っす、と見るからに気だるげな様子で、言葉を締め切った。

「あ、あの〜」

おずおずといったふうに手を上げる、確か相川さん。

「男、ですよ。本当に」

「そりゃまあ、決して女ではないっすね」

相川さんを引き金に一つ、また一つと手が上がっていく。

その様子を千冬姉は鬱陶しそうな眼で見ながら、口を開いた。

「七森の件は後で個人的に聞け、フロンティーニの質問を一つだけ今は受け入れる」

時間が無いからな、と付け加える千冬姉。

少し不満気な顔を浮かべるクラスメイトだったが、千冬姉の言葉に不承不承といった様子で、再生したビデオのように手は下がっていく。が、一つだけ未だ下がない手があった。それは

「質問を許す、オルコット」

「はい」

ガタツ、と椅子を鳴らして立ち上がったのは他でもない。

高貴なオーラを放ち、今日も腰に当てた手がやけに似合っているイギリス代表候補生でブルーティアーズを専用機に持つ、セシリア・オルコットだ。

「イタリア代表候補生でわたくし達と同年代はいらっしゃらないと聞き及んでおりましたが？」

ブルーの瞳を鋭く細め、セシリアは問う。それは敵意ではなく、興味を湛えた質問だった。

「答えてやれ、フロンティアー」

「はい。それは、私の実家が道場で祖父が武術を教えていまして、私は物心付いた頃から武術を嗜んでいた事もあり、私の年齢で私と比肩する腕の子がいないまでに武が成長しました。そして、

イタリアで開発された第三世代ISと私の武術の相性がいいことを知ったイタリアの企業が私を訪ね、そして適性テストを受けたところ、A+の判定が生まれて、努力した結果半年で代表候補生になれたんです」

祖父は反対でしたが、とはにかむソフィアさん。

そしてチラリと、ソフィアさんが相変わらず気だるげな七森を横目で見た。

やはり知り合い、なのだろうか。

そしてその答えを聞いたセシリアはと言うと、

「……分かりました」

意外だった。俺やラウラの時みたいに『決闘ですわ』とか言うと思ったのに。

ギロリ

……またバレた。

「一夏さん、わたくしを喧嘩っ早い女とお思いですか？」

逆に違うのか、とは口がさけても言えない。

「んん！！では、これよりトーナメントの反省を踏まえ、ISを使用した自主訓練を二組と合同で行う。織村、七森とこれからは動き、至らぬ所は教えてやれ」

「わかった」

学園に来てから初めての、本物の男だ。

いい友達になれる事を祈った。「はじめまして、織村一夏だ」

この学園に来て、おれ事七森桜夜が最初に思った事、それは、めんどくせえ帰りたい、だ。

まずクラスの女子からの奇異の眼差しだ。

大半が「二人目の男」に対する視線が痛いったらありやしねえ。そんなんで大興奮するほどおれはMじゃねえつつうの。

しかも今まではテレビ越しだったが、生で見た織村一夏はハンパないイケメンさんだった。そんなイケメンに比べておれは中の下から中の中とゆう平凡な顔。比べられれば勝てる訳がない。だから帰りたい。

そして極めつけにおれは隣に眼を移す。

今だけはまともにも、自分がイタリア代表候補生になった理由を演説しているソフィア・フロンティーニ。

そう、今だけは、だ。

大体半月前、初めて会った時の彼女におれは……。

殺されかけたな。まあ、今はおれに慣れたのか、あんな事はしなくなっただが。

一つ分かったのは死神が手に持つのは鎌ではなく、スナイパーライフルだったとゆう事だ。つか、おれがISを操縦できると知ったのも、こんなめんどくせえ学校に転入させられたのも、偏ひとへにコイツのせいなんだよな。

あー前の高校でダチとバカやりてー。

エロトークに花咲かせてー。

……、と。アホな事考える間にソフィアの演説が終わった。

「んん！！　では、これよりトーナメントの反省を踏まえ、ISを使用した自主訓練を二組と合同で行う。織村、七森とこれからは動き、至らぬ所があれば教えてやれ」
「わかった」

そう返事して、織村は立ち上がるなりおれに笑顔で右手を差し出してきた。

「はじめまして、織村一夏だ。一夏って呼んでくれ」

「ああ、七森桜夜だ。桜夜でいい。おれこそよろしくな」
数少ない、とゆうかただ一人の男だ。なるべく仲良くしたいからな。

おれも笑顔を作り、手を握り返す。

……よし、身長は負けたけど手のデカさは勝った。

「これから実習で、この教室は女子が使うから男子は空いてるアリーナ更衣室で着替えだ。早めに慣れてくれ」

「ああ、分かった」

少し女子の着替えを見たかったが、転入初日に変態覗き魔の二つ名は勘弁被る。

つ、と。

「ソフィア！」

離れたところで早くもあいつはクラスの女子に囲まれ、馴染めていた。

……女子には初対面でもガトリング撃たないし、首を斬ろうとかな。

「今日からがんばろうな！」

と、言葉を捨て去りおれと一夏は教室を出た。

EP 1 騎士と獣の邂逅（後書き）

ぐだぐだだったかもです。

もっとスマートに書けるよう次回からがんばります。では

あでゅー

EP 2 理想郷 理不尽 猫ニヤン(前書き)

こんにちわ

小学生にパシリに使われて水筒持たされた高校生の近場壮です。

今回は説明多いかもです。

書いてて思ったんですが、桜夜は実際に動かすとアホとゆうより
馴れ馴れしいですね……自分で書いときながら思います。

しかもアホより馴れ馴れしいってほうがピンと来るってゆうね。

今回から side 制を取り入れてみました。

余談ですが、一夏の一人称が『俺』、桜夜が『おれ』です。

EP 2 理想郷 理不尽 猫ニヤン

side - - N N A M O L I - S A K U Y A

朝の廊下、HR明け。

状況は極めて混沌^{カオス}

いや、おれにとってこの状況は紛れもない理想郷^{アウアロン}となっていた。

「いた！ あの子よ、二人目の男子！」

「ウソ！？ ホントに男だわ！？」

「いやん！ 織村君みたいな真面目って感じじゃないけど、それも男っぽ〜い！」

意外とおれ好評だった。

「すごい男っぽい！ 織村君みたいな美形タイプと違って親しみやすいタイプ！ 私と付き合わない！？」

突き合うのは大歓迎！！

「はいはい新聞部の毎度お馴染み薫子です！ 男子同士でパシャっとお願ひ！ 一枚でいいから！」

……最高だIS学園。

アリーナ更衣室に向かう廊下は、HR明け故におれの噂を聞いた女

子で溢れかえっていた。

「ほら桜夜走れ！ 授業間に合わないぞ！」

「やめる一夏、俺の首から手を離せ引きずんな！ 生まれてこのかたここまで女子に注目されたの初めてなんだよ！ これを機に可愛い娘とラブラブしてえんだよ！ ニヤンニヤンしてえんだよ！ はくなくせよよ！！！」

こんな千載一遇逃してたまるか！！

おれは一夏に首根っこ掴まれ、引きずられながらも理想郷に手を伸ばす。

遠ざかる、遠ざかっていくよお。

こちらら前の高校は全校生徒ほとんど男子しかいなかったから女に飢えてんだよ。

早く童貞^{チェリー}から抜けてえんだよ。

私さくらんぼなんだよ！！

「お前は知らないけどな、うちの担任は冗談にならないくらいスパルタなんだぞ！」

「んなの知るかい！ ああ、女の子が遠ざかっていく……。――夏のアホオ！！ せめて写真一枚くらいいいじゃねえか」

パシユ、と小気味のいい圧縮空気音をドアが立て、おれと理想郷は完全に断たれた。

はあ、一夏は融通が効かない。

おれの高校の友達だったら、こんな女だらけの理想郷は大興奮ものなのに。

「なあ桜夜」

一夏がピツタリと肌につく上半身用のISスーツをわずらわしそうに着ながら問いをおれに投げた。

おれのもだが、男子のISスーツってゆうのは基本的にへそ出しの上半身用とスパツみたいな形の下半身用の二つがある。おれ個人としてみれば、へそ出しとは如何なものいかがと思うんだよな。デザイン的に。

ちなみに一夏のスーツは上下紺、おれのは上下黒を基調に白いラインが入った結構カッコいいデザインだ。

対して女子のはレオタードやスクール水着に似たデザインだそうだ。テレビ越しだとスーツはISを展開しているせいで、部分的にしか拝めないから楽しみだったりする。

「ん？」

かくゆうおれもイタリアのお偉いさんがくれたISスーツの上半身を着ながら応答した。

どうでもいいけど、これ、すげえ着ずらいんだよな。

着ようとしても肌が引っかけたってなかなか進まないんだよ。

「俺の時はISを動かした男、ってその日のうちにニユースにな

つたけど、桜夜は一度もニュースになってないよな？　なんでだ？」

それか。

なんか事情聴取の時にチラリと聞いたような気が……。

え、と……。

「確か、おれがISを動かしたのはイタリアが貸し切った前の高校のグラウンドでさ。一時的とは言えイタリアの土地だったらしいんだよ。それをこじつけに、いろいろイタリアのお偉いさんは根回ししたみたいでさ。情報が流れるのが遅れてるらしいんだよ。でも明日には流れるんじゃないか？」

半月も情報操作でただけでも僥倖だったろうしな。

つと、やっと上半身着れたよ。慣れるまでは難しいなコレ。

「お前、自分の高校のとはいつてもさ、イタリアの土地に侵入したのか」

おれを見る一夏の眼、明らかに呆れてる。

出会ってまだ一時間も経ってないのに……。

だってISだぜ？

ロボット……正確にはマルチなんかスーッらしいけどな……だぜ？

男の子の永遠の憧憬だぜ？

そりゃあ見るしかないじゃん。たとえ火の中水の中精神で行ったよ。……いやまさか弾丸の中刃の中をくぐるとは思わなかった。逝くところだったね、真面目に。

ま、おれはいざとなったら死ぬ気で障害を超える人間だからな。来んのが銃弾だろうがなんだろうが常に余裕を持ち、臨機応変に危機を回避する。

見るよこの泰然自若、威風堂々とした姿。自信を持ち、己こそ一番だと矜持を持つ。これが真の『漢』ってもんだ。

「……桜夜、脚が生まれたての小鹿みたいにカクカク震えてるけど平気か？」

「……しょうがないじゃん。だって怖かったんだもん。」

カッコよく決めれば多少あの恐怖に勝てると思ったんだもん。

話しながらも一夏は着替える手を止めず、ロッカーにかけてあった下半身用ISスーツに手を伸ばした。その右腕には防具？のような白いブレスがスーツから覗いている。

「一夏、それ何？」

「ん？それって？」

「その右腕に付いてる防具？みたいなもの」

ああ、と一夏が防具？に視線を移した。

「ISだよ」

……へ？

鏡を見ればおれは鳩が豆鉄砲くらったような顔をしている事だろう。

「だからISだって。専用機ってのは普段はこうやってアクセサリ
の形状で待機してるんだと。さっきソフィアさんだっけ？あの人に
質問した金髪の新シリアもイギリス代表候補で専用機持ってるん
だ。他にも、今朝織村先生にオトされてた二人も専用機持ちだぜ」

「なんかもう、ISってのは何でもアリだな。人類の科学はこれ以
上進まないんじゃないか？」

「ハハハ、かもな」

朗らかに笑う一夏。

うん、一緒にバカは出来ないがコイツはコイツでいい関係が作れそ
うだ。

ちなみにおれは一夏と織村先生が姉弟であることは、事前にイタリ
アの人から聞いている。

確かに実際に見てみれば顔がよく似ていた。そして美人だった。

副担任とゆう山田真耶先生も美人……ってより可愛かったな。

おれより年上のはずなのにタメの女子と話してるような感じだった。

つか胸でかかった。メガ盛りおっぱいだった。

「そついえば桜夜、ちよつと気になつただけ……ヤバ！ もう時間無い！ 悪い桜夜またあとで聞くわ」

そついつて一夏はスラックスとパンツを一息脱ぎ捨て、下半身用I Sスーツを持ち上げた。あれつてパンツ履かないのかよ。

スーツからお山が盛り上がんなきゃいいけど。

side - - ORIMRA - ICHICA

「だから俺が悪かつたつて。いい加減機嫌直してくれつてシャルロット、ラウラ」

「ふん、倒れている私を看取らずに放つておくとは私の嫁の風上にもおけん奴だ」

「僕も放つておきつぱなしつてゆうのは許せないよ？ 一夏」

グラウンドに到着した早々の俺と桜夜の前に現れたのは千冬姉の出席簿から復活したラウラとシャルロットだった。

それから五分ずつと俺は必死で弁明している。これじゃあまるで嫁の尻に敷かれた旦那だな。

ラウラは腕を組み、俺を見上げながら話しているのだが、ラウラ

の高圧的雰囲気によって何故か見下ろされていると錯覚しちまう。

シャルロットは口こそ笑顔だし、眼も笑顔だ。しかし綺麗に細められた眼から時折覗く宝玉のような瞳には『憤怒』の二文字が如実に描かれていた。

藁にもずがる思いで俺は救いを求めた視線を投げた。しかし筭は新しいルームメイトの鷹月さんと話していて、セシリアはグラウンドの隅で携帯端末で通話中、鈴は……無理だ。何があったかは知らんが組んだ両腕の上で指をトントン叩いて、額には青筋が浮かび上がり、歯を軋ませて何かに憤っている。下手に接触すれば一段とややこしくなるに違いないから関わらないようにしよう。

桜夜は桜夜でシャルロットとラウラに軽く挨拶するとフラフラどこか行くし。アイツは女子に興味あるような無いような分からない。女子を見た瞬間に変態じみた事言つと予想してたのに。

「聞いている(のか)!？」

「はいい!？」

二人の言葉に思わず背筋が伸びる。

「大体貴様が我が軍であったなら軍法会議は免れんぞ。意識の無い者を放るような輩は我が隊にはいなかった。それをお前とゆう者は……」

グチグチ、　ネチネチ。

まだまだ続くなコレ。　女の子ってゆうのは何でこんな説教が長い

んだろう。

千冬姉は直接体に、暴力的に教え込むから話し短かったのになー。
にしても桜夜つて不思議な雰囲気だよな。まるで初対面じゃないっ
て錯覚するような親しみやすさがある。会って一時間なのにアイツ
の人柄が良く分かった気がする。なんとなくあれは誰とでも友達に
なれるって感じだな。

「（聞いている（のか）！？）」

「は、はい！！」

丸くなりかけた背筋がまた伸びた。

結局三分後、千冬姉が来たと同時に二人の頭蓋にはまた出席簿が
めり込んだ。

今度は俺も共に。

理不尽だ。

s i d e - - N N A M O L I - S A K U Y A

人の惚気ほどつまらない物は無えな。

一夏に説教している今日織村先生にのされていたあの二人、二人

とも独特の個性と話し方だったが、あの二人が例のフランスの代表候補生とドイツの代表候補生か。さつき軽く二人に挨拶したけどエライ驚きようだったな。まあ気絶してたわけだし、しかも転入生男だし、しょうがないか。気絶する直前、廊下を疾走する二人をおれとソフィアは見えたんだけどな。……先生の隣にいたおれらが見えないって、そんだけあの織村先生は恐ろしいのかねえ。

それはどうでもいいとして、無茶苦茶可愛かった。二次元だと海外の美少女は可愛く描かれているけど三次元で見ると、そうでもないんじゃないかね？とか思ってたけど、とんでもねえ。本物の美少女は三次元でも異常なぐらい可愛い。

金髪の僕っ娘のシャルロットは礼儀正しく、けれど胸元は破廉恥極まりなく、銀髪の子のラウラは小柄とは思えないくらいのおーラを全身で放ち、眼帯がそのミステリアスな雰囲気さらに増長している。

女子校だからブスも多いんじゃないかね？とか思ってたてすいません。

しかしどうにも、恐らく大半が二組と思われる奇異の眼差しが気になるな。

男だから珍しいのは分かるがあまりジロジロ見ないで欲しい。おれは一夏と違って容姿に自信は無いんだ。つかみんなISスーツの上にジャージの上着羽織ってんだけど。つまんねー。

さて、おれが不本意ながらお探しのもう一人の、見た目だけ美少女、中身は殺人姫はどこ行った。

とりあえず手近な人に聞いてみよう。

「なあ」

「え？ うわ、 噂の七森君だあ！」 うわ、 て何。 うわ、 て。

「君、 一組？ 二組？」

「え、あ、私？ 一組だよ、 でも、ゴメン！。 私織村君の方がタイプなの」

「……イヤそうゆうのじゃなくて、 ソフィア知らない？」

「え？ フロントティーニさん？ さあ、 フロントティーニさんが更衣室を出るとき以来見かけてないけど」
「てゆう事は、外にはいんだな。」

「どこ行ってんだ、 アイツ。 早く来ないと転入早々から先生に目を付けられるぞ。」

「分かった。 あとは自分で探すよ、 ありがとな」

確か更衣室とグラウンドってそんな離れてないから手こずんないですみそつだ。

そう言っておれは踵を返し、 更衣室方面へ走った。

「えと、 こう……でしたっけ？難しいですね、おじいちゃん直伝男性籠絡姿勢桜夜様仕様エディションワン。は、恥ずかしいですががんばりましょう、私っ」

……いたわ、ソフィア。

具体的に言えば更衣室の裏に。

「……ソフィア……」

「……え？」

白に近い金髪を背筋に沿うように流し、 穏やかとゆうより、 人を自然と和やかにするような雰囲気身を宿し、 整った顔立ちはまるで妖精を彷彿させる。普段と相違点があるとすればISSスーツとその上に羽織ったジャージと、 足元にある紫紺の布で覆われた四角形の何か。 それと今コイツがやってる姿勢だ。

左手は軽くグーにしながら手のひらと指先を前に向けて胸の横で固定、 右腕も同じくグーにしつつも手招きするように多少前に出して同じく胸の横で固定。 極めつけは右足を畳んで左足だけで起立している状態。

つまるところ『猫ニャンポーズ』だ。

その姿勢のまま、 薄い唇をわなわな震わせ、 おれを見て凍結している。

確かに可愛いんだが、コイツがこういうのを知っているとは思えない。

となると - -

「そのポーズの入れ知恵はお前のじいさんだな」

コイツのじいさんは、自己紹介通りイタリアで道場を開いて武術を教授している。本来は剣術を得手とした武術らしいが、時代と共に剣は消え武術一本に特化した、らしい。おれがISを動かして起こした事件の事情聴取の時にじいさんには会ったが、日本語もなかなか流暢であり、文武両道の厳格そのものとゆう性格の、趣味が日本文化全般なのだ。

しかしそこは腐っても人間とゆうか、完璧超人のじいさんにも決定があった。それは日本文化を愛するが故に通ってしまった道、茶道弓道和菓子着物アニメ……そう、アニメなのだ。日本が誇る世界最大のサブカルチャー、アニメーションに手を出してしまった。

それを受けてか、ソフィアがおれと知り合ったと聞いた瞬間、『世界の男児はこのような姿勢を須く敬愛する』などのたま宣わり先程の猫ニャンポーズなどをソフィアに伝授したらしい。

「あー、悪い、邪魔しちゃった」

ソフィア本人は少なからずじいさんから伝授された姿勢ポーズを執行するのには逡巡している節があるが、何故かおれに対して実行している。大方じいさんに、やれと言われたけど少しでも失敗すると恥ずかしいから練習中だったってところか。

ちなみに実際に見たのはこれがまだ二度目なのだがな。ま、可愛いからおれとしては眼福なんだけどな。

とりあえずおれは凍結しているソフィアに、遅れるなよ、などの旨を伝えてグラウンドに踵を返して走った。おれ優し。

そっぴああの紫紺の四角い何かは何だったんだ。

EP 2 理想郷 理不尽 猫ニヤン（後書き）

ダラダラと駄文でしたね、はい。

次回はオリ機体一号が出る！ かもです。

では今回も

あでゅー

EP 3 その運命緩やかに動く（クラウドチングスタート）

頭上に広がる深淵の無い青冥。

雨水を呑み、 僅かに湿った大地。

随所随所に植えられた樹木の葉が擦れる音。

あまりにも大きく美しく強く、 適い難い自然^{モノ}

そんなモノすらを己を引き立てる一部とする女性^{モノ}など、 見たことは今まで一度たりとて無かった。

今『まで』は。

そんな女性^{モノ}と出会ってしまった。

白とも見える金色の髪に柔和な顔立ち、 それでいて人の心を自然と和やかにさせる雰囲気^{モノ}の少女。 そして彼女が身に装うは服にあらず、一見で判る通り『機械』であり、一見で解る通り『機械』にあらず。

その外見は全体的に黄色を基調とし、 特徴的なのは少女の体格には不釣り合いな程広がったスカート状のアーマーだった。 不釣り合いな筈だ、 不釣り合いでなければ可笑しい程に広がったスカート。 なのにそれは、 そうあるのが当然のように存在する。 さながら舞台上上がる、 ドレスを着た童女^{ヒロイン}のようだ。

無言の時間が過ぎる。

視線は交錯し、意識は互いに交叉する。

ただ、ただただただ無言で互いの存在を確認しあう。

今まで恋などしたことが無かった。

もしかしたら、これが、この少女（モ）が噂（モ）に聞く恋の天使（キュベイト）なのかもしれない。

過ぎる。

時が過ぎる。

そして、死神（キュベイト）は矢ではなく、いつの間にか手にスナイパーの銃口で視線を遮った。

side - - NANAMOLLI - SAKUYA

「……………い……………くや」

やめろ、やめろ、撃つな。おれを撃つな。まだ死にたくねえ！助けて！イヤだああ！

「おーい桜夜ー？」

「……………ん……………？」

「おお、桜夜気がついたか」

背部で感じるゴツゴツした冷たい感覚といい、足の裏が地面に着いていない事といい、ひよつとして、おれ寝てた、のか？グラウンドの下真ん中で？恥ずツ！？

しかもなんか体がだるいうえに意識がぐちゃぐちゃしてる。ぐちゃぐちゃやって表現は変かもしれないが本当にぐちゃぐちゃしてる。その上目覚めから最悪だ。

「……………一夏」

「ん？」

「顔近え」

「あ、ワリ」

一夏がおれの眼前五センチにいたのだ。男の顔をこんな近くで寝起き早々見たくねえっつもの。しかもこんな状況だと……………ほら見る、一部の女子がキヤーキヤー言ってるじゃん。

しかもおれがもっとイケメンだったら尚良しだと？余計なお世話だっつうの！

女子共にちょっとした憤りを覚えながら上半身だけを起こし、首を鳴らす。

「つかなんでおれはこんな所で寝てたんだっけ」

確かソフィアを更衣室の裏まで呼びに行ってからグラウンドに走ってから、えっと、あら？ この辺から記憶が無いな。

「全然覚えてないのか？ お前織村先生に後頭部を強打されて気絶してたんだぞ」

ん？ ああ！！ そうだそうだ思い出した。

グラウンドにはギリギリ間に合ったものの一夏が出席簿を受けて悶絶してたから、今なら女子に声かけても一夏には気づかれず、怒られないと思って女子に声かけたら後頭部に……。

「自業自得だ」

と言いながら一夏は立ち上がった。

「だからって転入一日目の人間オトすかよ。 ぜってーお前の姉ちゃんを敵に回さねえ」

「それに越した事は無いな。 あ、 そうそうソフィアさんすごかったんだぞ？」

まだ上半身しか起き上がってないおれに笑顔と共に一夏が右手を差し出す。 その右手を掴んでグイッと一気におれは立ち上がった。

「なにが？」

「なにがって、もう全部だよ。千冬ね、織村先生の出席簿をよけたうえで出席簿を織村先生の手から取ったんだよ。本人は反射的に取ったらしくかったけどな」

「んでソフィアは織村先生に転入早々睨まれたのか？」

「夏は片口をひきつらせながら苦笑いを浮かべた。」

「睨まれたってより目を付けられた、かな。その時の織村先生はなんてゆうか、こう、面白い物見つけたって目だったな。だから今回はお咎め無しだった」

「面白いから見逃すってなんだよ！」

「なんって不条理。」

「ま、それがうちの担任だからな。さて、桜夜はまだISについて知らないだろ」

「ああ全く」

「だから今日は俺がISの基本を教えながら実習を見て回るぞ。て言っても今日は実習ではなく、この前のトーナメントの反省点探してみたいなものだけだな。グラウンドで反省点と改善点を探して、一年生は第三アリーナで学園の専用機を借りて改善点を練習するんだ。もう一、二組の専用機持ちは俺とシャルロットを除いてアリーナに行ってる」

「シャルロットさんは何してんの？」

「ソフィアさんにIS学園の校則を教えてるんだけど、もう終わってアリーナにいるんじゃないか？二人共」

「分かった」

「まためんどくさそうだなー」。

おれは気だるげにあくびを漏らしながら一夏と歩いていった。

あれから数十分、一夏からISの基礎や与太話を聞きながら女子の反省会を見て回って、今はアリーナに向かっているが……ダメだ。無理だ。不可能だ。

何がって、理解出来ないんだよな。

PICだとかロックシステムだとかさ。

「まあ気にするなよ。俺だって最初は一切合財分かんなかったし、今だって基礎の基礎しか教えられねえよ」

「でもお前って元藍越学園志望だったんだろ？おれなんて頑張って勉強して、それでもバカ校だぜ。オツムさんの出来が違えよ」

「そんな事はねえよ。それに割とIS動かしてるうちに覚えられる

もんだぜ。多分桜夜にも専用機が来ると思うし、全然大丈夫だ」

勉強に関しては自信ねえなあ。おれって前の学校でも先生に真顔で『お前進級マジヤベエよ』って言われた程だしな。

「ほら着いたぞ桜夜、ここが第三アリーナだ」

「銃弾の音とか爆発音とか聞こえないけど本当にここでISが動いてるのか？」

「ん？……あ、ホントだ。そついやアリーナの外に爆発音とかが漏れた事なんて無かったな」

何でだ、と首を傾げる一夏。

「まあいいや、中に入ろうぜ。生で見るISはスゲーんだぜ」
そう話しながらおれ達はアリーナに足を踏み入れた。

入ってから聞こえた銃声、爆音、轟音、その全ての音におれの心臓が何故か強く一拍を打った。

side - - OUT

午前中の第三アリーナ、ここでは二機のISが拮抗していた。

アンロック・ユニット
非固定浮遊部位が特徴の二機。

片や肩の横に浮いた攻撃的な印象を与える、棘付き装甲のIS。名
を『甲龍』(シエンロン)、担うは中国代表候補、鳳鈴音。
スパイク・アーマー

片や四枚のフィン・アーマーを背に従え、フィン状のパーツにB
Tレーザーの銃口を備える自立起動平気ブルー・ティアーズを
操る王国騎士を彷彿させるIS。名を『ブルー・ティアーズ』、担
うはイギリス代表候補、セシリア・オルコット。

「もらったわよセシリア!!」

すでにブルー・ティアーズを二機撃墜させた鈴は駆ける。
未だに浮遊している残り二機のブルー・ティアーズは悔し紛れ
と言わんばかりにBTレーザーを撃つ。撃つ撃つ撃つ。

その全てを視認し、猫もかくやと言うが如き機動で避けながらもセ
シリアに迫る。

両端に刃を備えた異形の青竜刀 双天牙月 を握る手に力を込める。

今が最高の好機、ここで逃していつ攻める。 龍砲 では距離をみ
すみす離し、相手に絶好地帯キルポイントを与えてしまつ。ならば近接戦で一気
に削る。

あと僅か一刹那で刃がセシリアに届く。

しかし鈴が見据えた先には、今の現状にはあまりにも不適な、それ
でいて己の勝利を信じて違わぬ不敵な笑みを浮かべたセシリアが、
こちらを見下ろしている(･･････････)。

- - 何かマズい!?

本能的な危機を察知した鈴は必死に身をよじる。ここで反応できた

のは鈴だからこそとも言えるだろう。

「今更遅くてよ？ご存知？……ブルー・ティアーズは今、八機ありましてよ！！」

セシリアのスカート状のアーマー。その突起が外れて、動いた。

さらに背後から空気を裂きつつ接近する音、これは……『誘導追尾型爆弾』（ホーミングミサイル）。

イギリス代表候補生セシリア・オルコット。誇り高き貴族である彼女が代表決定戦を礎に成長しない筈がない。二機による破壊力より、四機による手数と戦略で勝利する事を彼女は選んだのだ。

いつの間に……そう考えれば鈴には思い当たる節があった。

そう、セシリアが二機のBTレーザーを発射した瞬間にレーザーを視認してしまった。

そう思い至った時には前後が白と赤に染まった。

side-IN - OLIMRA - ICIKA

第三アリーナは拍子抜けなくらい閑散としていた。

人と言えば中央で試合している鈴とセシリア、そして観客席に座ってる俺と桜夜くらいしか見当たらない。

恐らく午前中の三時間は全てを改善点探し、午後に実践といった人達が大半を占めているだろう。

「あ、終わった」

今回はセシリアの勝ちみたいだな。

てゆうかミサイル増えてるし、俺と戦った時より戦略の幅も広がっている気がするな。

俺もうかうかしちゃいられないな。

「今勝った青い機体がイギリスのIS ブルー・ティアーズ。セシリアについては説明いらさないよな。んで、今負けて寝っ転がってるツインテールの女子が中国代表候補の鳳鈴音、おれのセカンド幼なじみだ。ファーストは後で紹介する」

と言った具合に桜夜にはちよくちよく説明を入れているんだが、その桜夜は――

「……」

無言。

俺達が着いた時には試合はまだ序盤で、最初こそ桜夜は言葉を発していたが、今は太ももに頬杖付いて無言。

ぼーっとしてるようでそれでいて奥に強い意志を秘めているような瞳は、どこでもない虚空を見据えている。

桜夜の唇が、動いた。

「……なんか、さ……綺麗だな」

「綺麗？」

『綺麗』ってどうゆう意味合いで？

確かにセシリアも鈴も一見すれば相当美人な線だと思っ。

けれど桜夜の言っている『綺麗』とはまた別のよゆうな気がする。

「ああゆうふう我真っ直ぐ戦える事が、何か無性に、こっ……美しい？いや違うちよっと違っ。あれ？なんだろ。綺麗、もなんか違っ気がしてきた」

桜夜にしては珍しく……と言ってもまだ知り合っ一日も経っっていないが……歯切れが悪い。

体制は頬杖を付いたまま、瞳もどこを見ているよゆうでもない。譫言つわごとのよゆうに、ただ言葉が桜夜から流れ出る。

「不思議だな。初めてISを動かした時にはこんな事一切感じなかつたのに。今は……」

頬杖を離し、桜夜は俺の顔を見据える。

「すげー心臓が高鳴っつんだ」

子供のよゆうに純粹で、それ故に危っい笑みを桜夜は浮かべていた。

何を言えばいいか分からない俺は、こちらに声を上げ、手を振っっているセシリアに手を振り返す事しか出来なかつた。

アリーナに注す午後の日差し。

桜夜の影は立てられた髪たてがみの所為もあつてか、鬚たてがみを逆立てて獲物に牙

を突き立てる黒い獣のように見えた。

EP 3 その運命緩やかに動く（クラウドチングスタート）（後書き）

……どうも、約束を守る男を自称していた近場壮です。

していた、ええ過去形ですとも。

すいません、オリ機体は次話に登場です。

それではまた近いうちに

あでゅー

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2942y/>

IS インフィニット・ストラトス 黒き牙 夢見の童女

2011年11月22日04時00分発行